第６学年　社会科学習指導案

日　時　平成 24 年 12 月 4 日（火）　第３校時
児　童　○○市立○○小学校　６年○組　○名
場　所　６年○組教室
授業者　日本史２
指導者　教諭　○○○○

１　単元名　「聖徳太子はすごかったのか？」

２　単元の目標と評価

（１）目標

・聖徳太子の業績を調べ、そのねらいや聖徳太子の理想を考えることを通して、飛鳥時代は氏族連合政権から中央集権国家への過渡的時代であったことを捉えることができる。
・聖徳太子の偉業やその背景、聖徳太子を取り巻く人間関係を分析し、聖徳太子という人物はどのような人物なのか理解し、本当に偉人といえるかどうか自分なりの考えを持つ。

（２）評価規準

・評価規準

ア．　関心・意欲・態度	イ．思考・判断・表現	ウ．観察・資料活用	エ．知識・理解
○聖徳太子という歴史人物に関心をもち、意欲的に学習に取り組むことを通して、歴史を多角的に捉える態度が見られる。	○聖徳太子がどのような人物だったか考え、調べ学習や資料を基に、根拠をもって「本当に偉人といえるかどうか」を判断し、表現することができる。 ○歴史や歴史上の人物に対して、偏った見方をせず、多角的に考えることができる。	○聖徳太子の四大革命について、資料を適切に活用したり、インターネットなどを利用して調査したりすることができる。 ○調べたことを自分なりに整理したり、工夫したりして発表したり、ワークシートにまとめたりすることができる。	○聖徳太子の業績や理想、周りを取り巻く人間関係を知る。 ○飛鳥時代は氏族連合政権から中央集権国家への過渡的時代であったことが理解できる。

・評価基準

ア．関心・意欲・態度

Ａ：聖徳太子に関心をもち、意欲的に学習に取り組んでいる。

B：聖徳太子について、学習に取り組んでいる。
C：聖徳太子について、あまり関心がない。

イ．思考・判断・表現
A：資料を基に、説得力のある根拠をもって、聖徳太子が偉人かどうか判断できる。
B：根拠をもって、聖徳太子が偉人かどうか判断できる。
C：聖徳太子が偉人かどうか判断している。

ウ．観察・資料活用
A：資料を適切に活用し、自分なりに整理して調べたことがまとめられている。
B：調べたことがまとめられている。
C：調べたことがあまりまとめられていない。

エ．知識・理解
A：学習事項がノートやワークシートにしっかりまとめられている。
B：学習事項がノートやワークシートに大体まとめられている。
C：学習事項がノートやワークシートにあまりまとめられていない。

３　単元について

本単元は、小学校学習指導要領第 6 学年の「内容（1）イ　大陸文化の摂取、大化の改新、大仏造営の様子、貴族の生活について調べ、天皇を中心とした政治が確立されたことや日本風の文化が起こったことが分かること。」を受けて設定された単元である。ここでは、内容の取扱い（1）－エに例示されている「聖徳太子」を取り上げた人物学習を行う。そして、聖徳太子の業績を調べ、そのねらいや聖徳太子の理想を考えることを通して、飛鳥時代は氏族連合政権から中央集権国家への過渡的時代であったことを捉えることができるようにするのがねらいとされている。

既習事項としては、児童は縄文時代～古墳時代を学習している。時代の流れや移り変わりを意識し、その時代の特色が理解できるように指導していきたい。また、聖徳太子の学習を足がかりとして、飛鳥時代の特徴である大化の改新や仏教の伝来なども指導していきたい。

本単元は、飛鳥時代を 6 世紀中葉から 7 世紀中葉までとしておくと、推古朝はちょうどその中頃にあたり、内政・外交・文化の三面にわたり一大転機を迎える激動の時代であるといえる。すなわち、内政面ではそれまでの氏族連合政権から中央政権国家への移行であり、外交面では親百済・対新羅から親隋・唐外交への転換であり、文化面では古代文化から儒教・仏教に基づく文化への形成である。6～8 世紀（飛鳥時代・奈良時代）は聖武天皇および奈良の大仏を象徴とする中央集権国家体制の成立といえる。そして、そのスタートが聖徳太子となるだろう。しかし、聖徳太子の生きた推古朝はいわば氏族連合政権的色彩の方が濃く、むしろその実質的スタートは大化の改新以後だとしたほうが良いといえるだろう。つまり、推古朝は氏族連合政権から中央集権国家体制への内政・外交・文化における過渡的・変革期といえる。

ここでは、天皇を中心とした中央集権国家づくりを目指す聖徳太子の業績１つ１つを調べる。しかし、その背景には、蘇我氏をはじめとした諸豪族の存在があった。橘豊日皇子は蘇我稲目の娘堅塩媛を母とし、穴穂部間人皇女の母は同じく稲目の娘・小姉君であり、つまり聖徳太子は蘇我氏と強い血縁関係にあった。そのため、常に彼らを念頭に置きつつ施行されたものであり、公地公民に基づく皇権確立を目指す皇室と私地私民を基礎とした豪族との対立があった。こういった時代解釈はそのまま学習内容として教えるのではなく、児童自らが資料を基に分析し、その時代に迫れるようにしたい。そして、聖徳太子を「時代の先鞭を付けた偉大な哲人政治家」という一面的な見方を児童に植え付けないため、聖徳太子についての批判的分析も取り扱う。最終段階では、これまでの学習を通して、聖徳太子という人物はどのような人物か理解し、本当に偉人であるといえるかどうかを考えさせることで、意思決定力を養わせる。加えて、歴史や歴史上の人物について、多角的に見る力を培わせたい。

また、本単元の指導においては、資料を活用し、児童の活動の時間を多く確保する。教科書に掲載されている資料だけでなく、児童の興味・関心を惹く視学資料も使い、指導を行っていく。

具体的には、まず教師によるエピソード紹介や旧壱万円札と聖徳太子の像を提示することによって児童の興味・関心を惹きながら、または児童に聖徳太子について知っていることを発表させながら学習へと導入する（「人物との対面」）。次に、その業績や文化遺産を調べさせ、その理想を考えさせたり、聖徳太子を取り巻く人間関係を理解させたりする（「人物調査」）。そして、聖徳太子の業績には悪い側面もあることを理解させる（「人物批判」）。ここでは、グループ学習・発表を取り入れ、児童自ら与えられたテーマについて調査し、まとめる活動を行う。そして、最終段階では、聖徳太子の偉業の背景にあることや問題点を資料から読み取り、「聖徳太子は本当に偉人といえるかどうか」を意思決定させる。そのために、教科書の記述にはない、違う視点からの資料を用意する必要がある。

これらの学習過程を通し、聖徳太子の生きた時代はどのような時代であったか、児童自身に考えさせたい。そして、児童が調べたことを論理的に分析し、実践的判断力をつけられる授業展開にしていく。

以上をふまえた上で、次のような単元の指導計画を立てた。

４　指導計画（５時間扱い）

次	時	主な学習活動	各時間の評価規準
1	1	○聖徳太子の人物像をつかむ。 ・旧壱万円札や聖徳太子に関するエピソードから聖徳太子とはどのような人かつかむ。 ・聖徳太子の３枚の像を比較する。	ア　聖徳太子という歴史上の人物に関心をもち、意欲的に学習に取り組んでいる。 A：聖徳太子に関心をもち、意欲的に学習に取り組んでいる。 B：聖徳太子について、学習に取り組んでいる。 C：聖徳太子にあまり関心がない。

2	2 ・ 3	○聖徳太子のしたことを調べ、発表する。 ・四大改革「冠位十二階」「十七条の憲法」「遣隋使派遣」「法隆寺建立」について、それぞれの内容とねらいを調べる。 ・資料を基に、批判的面もまとめる。 ・グループごとに模造紙にまとめる。 ・まとめた内容をグループごとに発表する。 ・聖徳太子の理想「天皇中心の、仏教を基調とした平和で豊かな国づくり」を理解する。	ウ　資料やインターネットを活用し、聖徳太子の業績を調べ、整理したことを模造紙にまとめることができる。 A：資料やインターネットを適切に活用し、調べたことを自分なりに整理し、まとめることができる。 B：調べたことをまとめることができる。 C：調べたことをあまりまとめられていない。 エ　聖徳太子の業績や理想、飛鳥時代の特色を理解できる。 A:学習事項をノートにしっかりまとめられている。 B：学習事項をノートに大体まとめられている。 C:学習事項をノートにあまりまとめられていない。
	4	○聖徳太子の人間関係を調べる。 ・聖徳太子と蘇我氏や天皇家との関係を調べる。 ・聖徳太子を中心とした人間関係図を書く。	エ　聖徳太子と周りを取り巻く人間関係を理解できる。 A：人間関係をしっかり理解した上で、適切な人間関係図を書くことができる。 B：人間関係図を書くことができる。 C：人間関係を調べることができる。
3	⑤ 本 時	○聖徳太子は本当に偉かったのか？ ・聖徳太子の業績や理想、聖徳太子が関わった出来事をまとめる。 →グループでまとめた模造紙を参考にする。 ◎「聖徳太子は本当に偉かったのかどうか」について理由も含め、意思決定する。	イ　聖徳太子がどのような人物だったか考え、調べ学習や資料を基に、根拠をもって「本当に偉人といえるかどうか」を判断することができる。 A：調べ学習や資料を基に、説得力のある根拠をもって、聖徳太子が偉人かどうか判断できる。 B：根拠をもって、聖徳太子が偉人かどうか判断できる。 C：聖徳太子が偉人かどうか判断している。

5　本時の学習（5／5時間目）

（1）　本時の目標

・聖徳太子がどのような人物だったか考え、調べ学習や資料を基に、根拠をもって「本当に偉人といえるかどうか」を意思決定する。

・歴史や歴史上の人物に対して、偏った見方をせず、多角的に考える。

・聖徳太子の人物像から、飛鳥時代の特色を理解する。

（２） 評価規準

・聖徳太子がどのような人物だったか考え、調べ学習や資料を基に、根拠をもって「本当に偉人といえるかどうか」を判断し、話し合いを通し表現することができたか。（イ　思考・判断・表現）

・聖徳太子の業績やそれに対する批判的側面から時代背景を理解することができたか。（エ　知識・理解）

（３） 準備

・ワークシート　　・グループでまとめた模造紙（教室の壁に展示）

・聖徳太子の肖像画

（４） 展開

過程 (時配)	教師の指導	○児童の活動・発言	☆指導上の留意点 ★評価
事 象 提 示 (10)	・聖徳太子の肖像画を提示する。 「今日は、これまで勉強してきた聖徳太子という人物についてまとめをします。そして、授業の最後に聖徳太子が生きた時代がどのような時代だったかもまとめます。」		
	○前時までの振り返りを行う。 「これまでに聖徳太子の業績として、四大改革について調べましたね。四大改革は何があったか覚えている人、発表してください。」	○前時までの振り返りをする。 四大改革を挙げる。 ・冠位十二階 ・十七条の憲法 ・遣隋使の派遣 ・法隆寺の建立	☆グループごとにまとめた模造紙はあらかじめ教室の壁に掲示しておく。 ☆内容も簡単に確認する。
	「聖徳太子の理想は何でしたか？」	・「天皇中心の、仏教を基調とした平和で豊かな国づくり」を理想とした政治	☆四大改革や聖徳太子の理想などが出なかった場合は、前時までのプリントを参考にさせる。
	「前回の授業で聖徳太子と蘇我氏や天皇との関係を勉強したよね？２つの出来事について考えたけど覚えているか	・（蘇我氏による）物部氏討伐 ・崇峻天皇の暗殺	

	な？」		
課題提示 (2)	○課題を提示する。 「みなさんが発表してくれた通り、聖徳太子は多くの業績を残して、天皇中心の国づくりを目指していましたね。そして、その反面では良くない面もありました。それでは、聖徳太子は偉い人と言っていいのかな？考えてみましょう。」 （板書）聖徳太子は本当に偉かったのか？	○課題を把握する。	
予想 (5)	○予想を立てさせる。 ・ワークシートを記入させる。 「自分の考えをワークシートに書いてみましょう。」	○予想をする。 →ワークシートに「聖徳太子は本当に偉かったのかどうか」について、理由を含め、今の段階の自分の考えを書く。	☆前時までに聖徳太子について調べたことを基に、自分なりの予想を立てるように促す。 ☆机間指導をしながら、自分の予想には明確な理由付けさせる。
交流する (20)	○立場をはっきりさせ、互いにその理由を発表させる。 「それでは、聖徳太子は本当に偉かったのかどうか、立場をはっきりさせ、その理由を発表してください。」 ・児童の意見を随時板書する。	○立場をはっきりさせて意見を交換する。 ＊聖徳太子は偉いと考える側 ・理想で終わってしまったとはいえ、平和で豊かな国づくりを目指した聖徳太子は偉い。 ・聖徳太子が遣隋使を派遣したおかげで、中国の進んだ文化や政治の仕組みを取り入れることができた。 ・聖徳太子が冠位十二階を制定してくれたおかげで、誰もが重要な役職につける機会を得ることができた。 ＊聖徳太子は偉くないと考える側 ・いくら仏教のためだからといって、人を殺すのは許されないこ	☆多くの意見がでるように、なるべく多くの児童に発言させる。 ☆両方の立場の意見をバランスよく出さるように心掛ける。

		とだと思う。 ・蘇我氏の言いなりばかりで、全然天皇中心の国はできない。 ・平和で豊かな国をつくりたいのなら、蘇我氏のような大豪族が好き勝手やらないようにしなければならなかったのではないか。 ・結局、理想は理想で終わった。 ・十七条の憲法で争わないことが定められているが、実際は争いばかりだった。	
まとめ (10)	○まとめ① 「それでは、いまの意見交換を踏まえて、最終的な自分の意見を理由も含めてワークシートに書きましょう。」 ○まとめ② 「最後に、先生が黒板にまとめを書くので、ワークシートの括弧をすべて埋めてください。」 （板書） 聖徳太子は、（**天皇中心の新しい国づくり**）を目指したが、その背後には有力豪族の（**蘇我氏**）の存在があり、その協力なしでは政治が行えなかった。 ↓ 飛鳥時代（聖徳太子の生きた時代）は、大和朝廷での（**豪族中心**）の政治体制から（**天皇中心**）の政治体制への過渡的時代であった。 ○次時の説明 「次回の社会の授業は、聖徳太子の死後、どのようなことが起こったか勉強したいと思います。」	○ワークシートに最終的な自分の意見を書く。 →意思決定する。 ○ワークシートのまとめを記入する。	☆自分の意見を自由に書くように促す。 ☆必ず理由も書くようにする。 ★評価 イ　聖徳太子がどのような人物だったか考え、調べ学習や資料を基に、根拠をもって「本当に偉人といえるかどうか」を判断することができる。 A：調べ学習や資料を基に、説得力のある根拠をもって、聖徳太子が偉人かどうか判断できる。 B：根拠をもって、聖徳太子が偉人かどうか判断できる。 C：聖徳太子が偉人かどうか判断している。